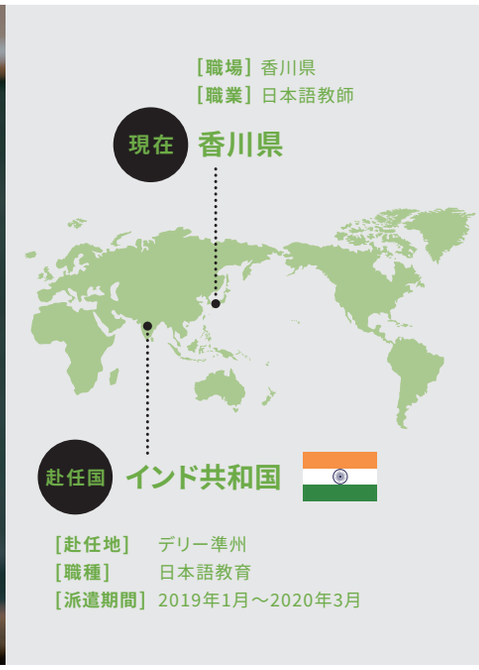

日本語が人と人をつなぐ 地域を舞台に、未来が開く種をまき続けたい

上原 由雅さん はずむ日本語 代表
Yuga Uehara

JICA国際協力出前講座で体験談を聞いた小学生の頃から、漠然と抱いていた「海外在住」と「青年海外協力隊」への憧れ。台湾で日本語教師としての経験を積み、夢だった協力隊としてインド・デリーの国立大学に派遣された。今の目標は、日本語教師グループの事業化、そして異文化を尊重しあえる地域づくり。彼女の挑戦がこれから始まる。

JICAの出前講座をきっかけに 青年海外協力隊へ

「海外在住」と「青年海外協力隊」。上原由雅さんが抱いたそれらへの憧れは、小学生の時にJICA国際協力出前講座で協力隊OBから聞いた体験談から始まった。その後、国際関係について学べる大学へと進学。在学中に参加したカンボジアでのスタディツアーで、現地で活動している協力隊員から「技術を教えるのは次の世代を育てるため」という言葉を聞いた。「教育」の意味を初めて理解した瞬間だった。その後知った「日本語教師」という職業に、憧れていた未来への道筋が照らされているような閃きを感じた。

晴れて日本語教師となった上原さんは、台湾でそのキャリアをスタートさせ、3年間現地の日本語学校で勤務。帰国後、念願だった協力隊への応募を決めた。

少しでも課題を解決へ 導こうとしたインドでの活動

ずっと夢に思い描いていた協力隊としての海外生活。その舞台はインドだった。インドの日本語教育の中心的機関である国立大学で、主に1～3年生を対象に、日本語の文法や読解の授業を担当した。赴任後は優秀な生徒が多いことに何かと助けられたが、学科の予算や教員が少ないという理由で、日本語教育を専門に学んでいない日本人留学生が、会話授業を担当しているという状況に驚かされた。現状を知った上原さんはその授業を担当し、留学生たちにサポートに入ってもらうことで対応した。また、授業以外で生徒が日本文化に触れる機会がなかったため、季節に応じた日本の文化を体験する「日本文化クラブ」を立ち上げ、週に一度の実施を試みた。毎回欠かさず出席する生徒がいたことが嬉しかった。

小学校の生徒に、一対一で向き合いながらジェスチャーも交えつつ優しく説明をする。

間違いやすい漢字があれば、黒板を用いて一緒に復習する。

県内の企業にて、外国籍の社員を対象に月4回の日本語レッスンを行う。

文化祭の歌・劇の練習や、大使館で行われる日本語スピーチコンテストの練習も積極的に受け持った。教師同士の授業の進捗情報を共有するべく、SNSを用いて連携を取ることにも尽力した。そんな最中襲ったのが、世界的な新型コロナウイルスの感染拡大。志半ばで一時帰国を余儀なくされた。

日本語教師としての社会還元と日本語教育の事業化へ

「活動はこれからだ、と思っていたので悲しかったですが、現実を受け入れ、与えられたこの場所でできることをしていこう、と考え直しました」と話す上原さん。帰国すると、「外国人社員に日本語を教えてほしい」と企業から声がかかった。「県内在住の外国人が年々増えていると知り、日本語指導の面でサポートできればと思いました」。

これを好機として、現在はフリーランスの日本語教師として地元を舞台に奔走中だ。活躍の場は、企業・学校・外国人技能実習生の監理団体など、実に様々。活動を通して、日本語教師に対し出張授業などの需要が高まっていることを肌で感じた。それと同時に、日本語を学ぶ在留外国人に接する日本人にも課題があることに気付く。「私たちが使う言葉は、彼らにとって難しい時があります。しかし、少し工夫して簡単な単語を使えば、伝わる内容は増えるはず。そんなことを、企業や行政窓口などに伝える活動も始めていきたいんです」。

日本語を学ぶ在留外国人の日本語力を高め、同時に日本人を対象に「やさしい日本語普及活動」も並行して行う。そんな日本語教育の事業化を目指し2021年に立ち上げたのが、日本語教師グループ「はずむ日本語」だ。情報交換や職業的地位向上のために、日本語教師同士の横のつながりを生むことも狙いのひとつだ。今は出張授業を行いつつ、独自のクラスレッスンを計画中。登録する日本語教師は、現在11人にも増えた。日本語教育をボランティアに依存している県内の現状を打破するべく、組織化することで社会に働きかけていくつもりだ。

日本語教育を通じて相互理解が深まる地域づくりを

上原 由雅さん プロフィール

香川県出身。香川大学経済学部卒業後、台湾で日本語教師として勤務。2019年に青年海外協力隊としてインドに派遣。帰国後、フリーランスとして地元の外国人を対象に日本語教育を行う。日本語教師団体「はずむ日本語」の代表。

ある時友人がかけてくれた言葉が、ずっと彼女を支えているという。「日本語教師のことを、“日本語を学んだ人たちが将来日本の力にもなってくれる、いい仕事だよね”と言ってくれたんです。その言葉で、自分の仕事が生徒たちの将来や日本の未来につながるものである、ということを改めて感じました」。すぐに実をつけずとも、日本語を学ぶことは将来の選択肢を増やすことなのかもしれない、という思いが強くなった。「これからも、一教師として日本語学習者の可能性を広げる一助になれれば。それだけでなく、日本人にも異文化理解を深める機会を提供していくことができれば、地域は互いを尊重し合う、より良いものになるのではないでしょうか」。そう上原さんは微笑んだ。

上原さんへのエール！

高松市立中央小学校
教頭
西山 英希 さん

世界に羽ばたく広い視野を子どもたちに伝えてほしい

上原さんは、明るく信頼できる先生。子どもたちと距離も近く親身になってくれているので、授業も安心して任せています。担任の先生方とも上手く連携を取っていて、語彙力チェックシートなどを活用し、それを元にカリキュラムを組むなど、それぞれの子どもに合わせた計画的な教育をしてくれていると感じています。
これからも子どもたちが生活する上で自信につながるような日本語を教えていただき、同時に海外で培ったその広い視野も彼らに伝えていってもらえれば、と思います。